## 京都琵琶協会の二月例会

二月七日(日)午後二時本部平井会長宅。晴天ながら時折り粉雪の舞うなかを平井、水内、木下、桜井、牧、矢吹、山岡、安住、梅原、楊、戸倉、馬場、植村並びに楊夫人、高橋、福島の三賛助会員、伊吹夫人、それに金沢への旅行の途次立ち寄られた若宮旭登女史、以上出席。例により数氏研修演奏のあと①春の演奏会を五月二十三日(日)昼本妙寺本堂を会場として開催決定、②筑前琵琶楽器一面を戸倉旭嶺氏の好意により常時協会に無償無期限貸与快諾、③会計理事の牧南水氏病後のため後任人選の件などを附議し夕食を共にして七時なごやかに解散した。

## 錦心流緻水会如月会新春演奏会

二月二十一日(日)昼大阪市立北会館（次号詳報）。

## ラジオ琵琶放送

○…一月二十一日(木)午後三時十分ー三時四十分NHK・FM"邦楽の時間"に平山万佐子女史が「川中島」「狩野の雨」二曲を放送。

○…一月二十二日(金)午後三時十分ー三時四十分NHK・FM"琵琶楽コンクール入賞者"の時間に田中光水（二位）ー本能寺、田原旭崇（二位）ー羅生門、佐藤智水（一位）ー厳流島を各放送

○…一月二十三日(土)午後六時ー六時四十分NHK・FM"邦楽百番"の時間に押田旭窈「那須与市」、鶴田鶴史、田中之雄、瀬戸竜介の三氏「あゝ平家壇の浦」を各放送。

## 飴谷六水(新太郎)氏

旧臘十二月十日心不全のため逝去、享年七十三歳。故松田静水氏門下で奥伝、教師免状を受けて子弟の育成をはじめたのが十二歳の時、最少年の教師として当時評判が高かった。昭和四年総伝。前錦心流一水会本部会長で敏腕をふるったが晩年は健康を害して静養中であった。上品且つ美事な捌捌きの演奏振りは定評があり全琵琶界のために惜しい人を亡くした。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。（東京都杉並区成田東三丁目三一の八）。

## （予　告）

○…**京都琵琶協会の三月例会**　三月六日(土)午後二時本部平井会長宅。

○…**大阪旭香会早春の調べ**　三月七日(日)午前十一時大阪市東区本町四丁目大阪津村別院ホール。主催大阪旭香会（会主菅旭香女史）青葉の笛ー菅旭香、舟弁慶ー渡島旭鶯、安宅ー山崎旭萃のほか独奏合奏をはじめ琵琶舞踊、箏曲等全二十一題、尺八付。

○…**第二回青壮年琵琶演奏会**　三月七日(日)正午東京港区赤坂公会堂、主催尾崎三郎氏、（入場無料）。出演者（詩吟）田中吟翠、広瀬圭穂外七人▼（琵琶ー青年部）吾妻江雪、山下旭瑞外三人▼（同ー壮年部）金森静枝、押川旭葉、座間桜水、高田米水外四人

○…**京都醍醐寺桜祭に琵琶献奏会**　四月十八日(日)昼、大阪琵琶同好会協賛。

○…**大阪平野大念仏寺大法要に献奏琵琶会**　五月五日(木)昼、大阪琵琶同好会協賛。

○…**各流派春季琵琶演奏会**　五月二十三日(日)正午京都東山仁王門バス停前本妙寺本堂、主催京都琵琶協会。

○…**各流派琵琶名流演奏大会**　六月五日(土)十時半ー十八時大阪北御堂津村別院ホール、主催日本琵琶楽協会関西支部（有料）。

## あとがき

長い冬が終ってようやく三月の浅春を迎える●暖冬とは云ってもさすがに冷寒日も続き日課の戸外散歩で両手の感覚を失なう日も幾日かあった●冬眠の琵琶界も又活気を取り戻し各地で演奏会など盛んになろう●琵琶月刊機関紙「芸の友」が主幹鈴木誉士氏の老齢と病気のため本年二月号限りで廃刊されるという●昭和二十五年春第一号発行以来三十二年間に亘る今日まで一回の欠刊もなく連綿として三百八十三回の発行を続け、陰に陽に琵琶界に貢献された功蹟は誠に大で筆紙に尽くし難い、●毎月下旬になるのを待ち兼ねて郵送されてくる翌月号を、むさぼるように一と息に読破して大いに啓発されていたのに、今後この楽しみが無くなると思うと本当に淋しい●筆者も毎月の「京絃」編集には想像を絶する苦労をしているので鈴木主幹の長年の御心労は充分理解できる●月刊紙の発行には編集者は一般の人よりも一ケ月早くその季節に浸っている気分になってやらなければならぬ●たとえば二月初旬の雪の降るなかでも編集子は初春の長閑な気分を持って三月一日号の編集をしなければ内容に狂いが生じる●嘘のような是等の苦労を三十二年もの長い間よくも続けて下さった鈴木芸の友主幹、本当に御苦労でした。どうか今後は充分御自愛の上余生を楽しく過ごして頂きたい。

昭和五十七年三月一日発行（非売品）
編集者　植村寛水
発行所　京絃社
吹田市山田東一丁目三一番B六一四
電話〇六（八七五）〇三二六番



琵琶機関紙　京絃　第三三三号　京絃社

# 平家の栄華と都落（二）

ばくすい

六波羅で、この報告を受けた宗盛は、福原（神戸）の別荘に滞在中の父清盛に急告する。清盛は急いで都へ駈せ上り「高倉の宮をからめ取り土佐へ流せ」と下知する。命を受けて宮の御所へ向うのは、源兼綱と源光長。兼綱は源三位頼政の次男で、頼政はいま以仁王の計画の参謀長である。して見れば実子の兼綱がこれに無関係である筈はない。それを知らずに兼綱を討手の司令官に任命したとは、清盛としては迂闊であった。

兼綱は御所へ向う準備をすると共に、ひそかにこれを父頼政に知らせた。頼政は急遽使者を以て宮に連絡し「至急三井寺へお入り下さい」と進言したので、宮は婦人の装（よそおい）で御所を出て三井寺に入いられた。

お留守を承るは長谷部信連、薄青の狩衣の下に萠黄おどしの腹巻を着て太刀を佩き、三條通りの大門も高倉面の小門も両方とも開け放って討手を待った。五月十五日深更、子の刻というから夜の十二時、討手の兵三百余騎御所を取囲む。兼綱は殊更に門前遙かの所に馬を留め、光長は乗馬のまゝ御門の中に入り「謀反の由承りお迎えに参上」と呼ばわる、「宮は御不在」と信連が云うと、光長はこれを無視して兵に捜せと下知すれば、信連は立腹し「乗馬のまゝ門内に入るさえ無礼である」のにその態度は不遜である」と、討手の侍十四、五人を対手に戦えば討手は退却。雲間を出た満月は御所内を明かるく照らす、信連は奮戦したが多勢に無勢で負傷して遂に生捕られた。六波羅では清盛の面前に信連を庭に引きすえ「勅命によって参った者達に抵抗するとは不届至極」といえば「此の頃は山賊共が勅命といつわって押入るとの噂があり、山賊に違いないと思いました」と答える。清盛は信連の勇気頓智に感じて一命を助け、伯耆の日野へ流罪に処したが、やがて源氏の世になって頼朝は信連の武功を賞し、能登の領主として所領を与え、その名誉と子孫は後世に残ったという。

頼政は嫡子伊豆守仲綱、次男兼綱らを従え三百余騎、自らの館に火を放って三井寺に向い宮を守った。三井寺では比叡山と興福寺に援軍を依頼したが、叡山は兼ねて三井寺と感情のもつれがあり、平家から手当を受けていたので同調せず、興福寺は賛成したが出兵に時間がかゝって急の間に合わない。やむを得ず宮は三井寺を出て、頼政の一門と三井寺側の若大衆を併せ一千騎を従え奈良へ向われたが、疲労のため宇治平等院で休息中、これを知った平家方は、平知盛、重衡、行盛、忠度忠清、景清らが大軍を率い宇治川を挟んで対陣、頼政勢は敗れて仲綱、兼綱は戦死、頼政は宮を奈良へ落として自刃した。辞世の歌ー

埋れ木の花咲く事もなかりしに
　身のなるはてぞ悲しかりける

深山木のその梢とも見えざりし
　桜は花にあらはれにけり

花咲かば告げよといひし山守の
　来る音すなり馬に鞍置け

武将の風流、優しく勇ましく、頼政の歌集の中でもこれらは代表的の歌である。百人一首の中にあるー

わが袖は　潮干に見えぬ沖の石の
　人こそ知らね　乾く間も無し

これは二條院の讃岐、つまり頼政の娘の作である。（以下次号）

# 五絃閑話

水藤五朗

## 芸の場

常時に芸の場として設けられているものとして、寄席、歌舞伎、能楽堂等々…があってそこで厳しい芸の修業と、大衆に密着した芸の発表があることを、我々は知っている。

そこはプロの世界であって、巧拙を超越して、芸に生活を賭ける真剣な人々の集まりである。

琵琶にはそれがない。ないと云うことは、箏曲の様に家庭音楽である故に、家での自己訓練が基調になる音楽芸能であるか、と思うと、今日ではその様な面は琵琶には望めなくなっている。箏曲には、三曲合奏と云う尺八三絃との合わせがあるから、そこでは厳しい技術的訓練と、協調が要求される。が、琵琶にはそれもない。即ち琵琶の芸の修練は自由である、と同時に、一人よがりになりがちでもある。いや、むしろそのような面が強く出てきたのが今日迄の歴史ではなかったろうか。

落語や講談を始め、とかく一人芸の世界は芸の客観的評価が下しにくい。自分では、天狗になるつもりはなくても、やはり一人の芸である以上、自由な面は強い。それが自信になり、ウヌボレにもなってゆく。これは人間の当然の心の動きでもある。が、これ等の芸能の社会では、厳しい芸の掟があり、寄席と云う修業、生活の場がある。一人よがりなウヌボレもこの中で生活してゆく限り許されない事になる。前座時代の数年間の修業の辛さは、近年は大分楽になったとは云うものの、やはり厳しいものではある。つまりプロの世界での修業である。

この点、琵琶には、プロの修業、又、その場もないのである。そうしてみると、琵琶の演奏会と云っても、他の芸の様にプロの集りではないことになる。つまりアマチュアの会なのであるが、どう云う訳か、その会の運営に琵琶会特有の伝統がある。

琵琶の会のそのほとんどが琵琶人自身の主催による会なのであるが、その開会目的がいまいであるのが、今日迄の特徴であった。つまり、一門の温習会である会であったとしても、賛助とか、応援とかで、その主催者の絃友と思われる人々が多数出て、一門の人々の演奏は前半に押しやられる。主催者と、その絃友の会になってしまっているのである。

一門の温習会が目的であるなら、主催者とその一門が中心になるべきで、賛助に一人か二人の出演が普通であり聴き手もその主催者と一門のを聞きたいのであって、多くの絃友のは別の機会に聞けばよいのである。会を終えて、主催者も、聴き手も一体何を演じ、何を聞いたかの交流が出来ぬまゝでいる。賛助とか応援でかけつけた絃友も、その立場を同じにする人々が多勢いるので、あまり気は乗らなくて、ただ自分が演じたい、又は、おつき合いで、となってしまって、応援しようとか、賛助に行くんだとの緊張も高まらない。主催者も聴き手も、自分の芸の発表の為の会なのか、それとも門人の発表の会なのか、この目的意識が分からぬ中に終ってしまう。

この繰り返しが結果として低迷の因になったのであり、他芸界では当然に行なわれている会が琵琶にはない。真のアマチュアの会も、又、真のプロの会もなく、結局、判然としないまゝ、プロもアマも育たない現状である。

今後、琵琶界が社会から芸能の集いとして評価されるためには、プロとアマの二つの道をはっきりと作り上げてゆくことにあると思う。それには、先ずプロとしての自立を心がける琵琶人が結束して、芸の場を作り上げてゆくことである。

スポーツに例えれば、琵琶はマラソンとか登山の様に、それでは経済的収入の望めない分野と云える芸分野である。が、マラソンや登山の様なアマチュアスポーツ程に厳しい訓練と、体力を要求される種目はないことを思うと、やはり琵琶界の課題に、厳しい訓練の道が作られなければならないと思う。マラソンや登山には、世界第一位二時間八分代オリンピック、国際大会優勝、世界初登頂等々の華々しい目標がある。そこには厳しい競いの



場があり、おつき合いや、一人よがりでは通じない、命がけの所なのである。

今後の琵琶の道にそう云う大きな目標と、それへの道程を設けてゆく事が大切である。勿論、プロとアマの二つの道と目標とをである。即ちプロの名人とアマの名人の二人があってよいのである。プロとアマの相違は決して芸道の上下でなく、並存である。野球で云えば、プロも高校野球も、基本野球ルールに変りはない。あるとすれば、試合の運営についてであり、それがプロ・アマの違いでもある。プロ野球では全てがプロの人で、その中に高校生はいない。又、その逆もない。

琵琶会も、今日はプロの会なのか、アマの会なのかをはっきりして、聴き手に対してそれに応じた運営と芸を披露するべきであろう。

# おんなの都（みやこ）（七）

落合一誠

## 常盤御前（4）

武士の戦いは生命がけ、敗ければ理由の如何を問わず必ずといってよいほど殺されてしまう。これは戦った当人は勿論、老人子供に至るまでそうなのである。ただ女性だけは余り殺さなかった。それは女性を尊重したからではなく、それほど重きをおいていなかったゆえで、生かしておいても復讐など出来ないと甘くみていたからであった。そして死一等を減じられた場合は、頭を丸めて仏門にはいる。僧はすでに人間にして人間にあらず、つまり俗世間に関係なしとされていた。

源氏一門を打ち負かした平清盛は、生き残った源氏一族を厳しく探索した。そして頼朝を捕え、残るは常盤の子今若、乙若、牛若のみとなった。

そこで常磐の母を捕えて拷問したが、母は六十歳で、生い先短かい自分はどうなっても若い者たちを助けたいと遂に口を割らなかった。然し人伝えに、母の災難を知った常盤は母を助けんがため六波羅への自首を決意し、雪中伏見路を大和へ落ちて行ったあの苦難の道を、また京へと上って行き、久方ぶりに清盛と対面した。

かっては義朝と共に、常盤の愛を得んとして争った清盛が、今は生殺与奪の権を握る、時の権力者で、恋の勝者であった義朝は敗者となって既に亡く、昔の恋人に今、清盛は絶対者の立ち場でめぐり逢った。

常盤は、自分は如何ように処分されてもよいから、三児の命だけは助けて貰いたいと歎願する。三人の子をなしたとは云え、絶世の美女だった常盤は未だ二十三歳で、花ならば今が盛り、そのあでやかさは清盛の心を乱すに充分であった。

清盛は常盤の母を許し、三人の子供も生命までは取らぬ、その代り常盤は長く清盛の側に留まるべし、と思いも寄らぬ寛大な処置をした。

それについては一つの幸運が手伝っていた。それは、先きに捕えられていた頼朝が、清盛の継母池の禅尼の計らいで、一命を助けられた前例があったからである。

頼朝を助けたのならば常盤の生んだ三児も助けてやろう。この幼児らが生長して平家に仇をするだろうと恐れる家臣もいるが、若しそうなったら、それも運命のいたすところ、力なき敗者の子供如きに討たれる清盛ではないと云い放って、重臣達の反対を押し切った。が、この時助命した頼朝と、未だ三歳に満たぬ幼児に過ぎなかった義経の二人が、やがておごる平家を西海の藻くずと化せしめたのだから、運命とは誠に皮肉なものである。

そして清盛は、一時の好色心のため、実に大きな代償を支払ったことになる。

こうして常盤は、源氏の大将義朝から平家の大将清盛の胸へと移って、寝所を共にする身となった。時に頼朝十四歳、今若九歳、乙若七歳、牛若三歳であった。

後日、今若は醍醐寺へ、乙若、牛若の二人も同じく僧となるべく定められていたけれど牛若は遂に髪を下ろすことをきらって、九郎義経という武人に成長していった。

やがて、清盛の寵愛が衰えた常盤は、望まれて一條大蔵卿長成の妻となった。そしてそこでも三人の子をなしている。そんな母を今

若、乙若は常盤を多情者といって恨んだが、常盤は、人の良い大蔵郷のもとにあって、はじめて安らぎを得て天命を完うしたのである。

（この稿完。次号から「淀君」）。

# 四絃漫筆

島津天嶺

## (七) 名器贋作に思う

昨秋鹿児島の図書館で入手した資料に「四絃界後編」という琵琶歌の本がある。明治四十二年の初版、「後編」となっているから、「前編」もある筈であるがここにはなかった。

この本の冒頭に「児玉利純翁所持の名号」として琵琶の写真が掲載してあり、後の頁にこの由来として「（前略）君は六月初回を以て元師一行の座乗せる軍艦満洲号に随乗して満韓の野に向ふ、一行は則ち元帥野津道貫、伊東祐亨、海軍大将樺山資紀、井上良馨、東郷平八郎、海軍中将有馬新一、上村彦之亟、枢密顧問官高崎正風、西徳二郎、清浦奎吾の諸公なり、一行行嘱に応じて弾ず、曲は古今の名作、聴く所の者は天下の英傑、弾く所の者は鹿島城の名手、其大絃は嘈々として急雨の如く、小絃は切々として私語の如く、嘈々切々錯雑して弾ずれば、大珠小珠玉盤に落ち間関たる鶯語花底に滑かに、幽咽たる泉流水瀨を下り、或は銀瓶忽ち破れて水漿迸り、或は鉄騎突出して刀槍鳴るの処に至りては江州の司馬ならざる三軍の雄将、武名赫々宇宙に輝揚せる英傑俊髦、鳴を静めて歎償し、海若（かいじゃく）為に波上に躍るの時、伊東元帥は先づ毫を揮ふて琵琶に題し松風と書す、（後略）」と説明されているが時は明治三十九年、日露戦争でロシヤに大勝した直後のことで、旧薩摩藩の将星等が琵琶の名手児玉天南翁を同行して晴れの満韓の古戦場廻りの大名旅行をしたようである。

この本のことを私は故萩原竜洋先生の高弟の川野虎男氏に話したところ「その琵琶は○○氏のところにあるのです、弾かれていません。」と如何にも残念そうな顔をされたが私も全く同じ思いであった。

ところで昨年末、町の話題を賑わしたバイオリンの古名器の贋作事件はとうとう芸大教授の汚職にまで拡大したが、音楽評論家吉田秀和氏は朝日新聞で「古名器のコピーはよく行われていることであり、その真贋を正確に鑑定できるような日本人はまだいない」といった趣旨のことを述べられている。

考えて見ればバイオリンは琵琶に比べればはるかに小さいし、匡体内の彫りもないのだからコピーは容易であり、現代の科学技術をもってすれば文字通り寸分違わぬ形状のものをつくり出すこともできよう。又使用する木の量も少ないから殆んど同じ材質の材料も得られるのではなかろうか。殆んど同じ材質のもので全く同じ寸法のものがつくられても、同じ音がでないということは物理的にはない筈であるが、やはり「木質部の古さ」が物をいうのであろうか。何れにしてもこの微妙な音をききわける耳は稀有のものであろう。

琵琶も木製の絃楽器、しかも木質の部分も多く胴の彫りも複雑であるから極めて「個性的の強い楽器」、従って名器が生れる可能性も高いということができるかも知れない。もっとも琵琶はバイオリンに比べてその音域も狭く、又今のところ歌曲の伴奏楽器であるので、必ずしも名器の必要性はないかも知れないが、いい琵琶を弾きたいというのは琵琶人全部の望みであろう。

琵琶を叩けばよいと教えられたこともある私も近頃は少し「音のよしあし」がわかるようになって来たようで、「松風」のような名器と称せられている琵琶をひき、その音色のよさを確めたいという欲望もでて来ている。

なお朝日の天声人語欄で「イタリヤではストラディバリウュの名器を政府が購入して演奏会に永久貸与している云々」という記事を見たが、さすが長い伝統を持つ芸術國家の心憎いやり方に私は驚嘆している。

（訂正）一月号本稿終りより九行目「弾絃一致」は「禅絃一致」の誤植。



天才的武将

# 織田信長

辻旭城

永禄十一年（一五六八）織田信長は、勅命により足利義昭を奉じて京の都に入った。

当時は戦國争乱の世の中で、その時代の凄まじい行動力を持っていた。彼の信念である天下統一の大事業により、新しい方向に導く途中に、天正十年（一五八二）六月二日、明智光秀の謀反によって本能寺の露と消えたが、信長が天下統一の大事業半ばにして終ったのは、かえすがえすも残念である。

信長亡きあと、豊臣秀吉は天下を取ろうとしていた。まづ山崎の合戦に光秀を破った秀吉は天下を取り、時代の大波の上に最も巧みに乗って躍りまくり、調子に乗り過ぎて天正十五年の九州征伐、続いて征韓の役などを起こし、晩年には京洛東山阿弥陀が峰の下に、奈良の大仏にならって大仏殿を建てることを計画し、五畿内中二十一ケ國の人夫を集めて高さ十六丈余の木像を東山に建設したが、慶長元年（一五九五）の大地震で倒壊したまま再建の出来ぬうちに秀吉は没したので、徳川家康は淀君と秀頼に奨めてこれを再興させた。

慶長十七年（一六一二）春、仏殿・殿堂等が完成し、同年八月落慶法要をしようとしたとき、家康は木喰上人としめし合わせて、南禅寺の清韓長老に命じ銘をつくらせた。秀吉の冥福を祈る大鐘銘中の〝國家安康〟の一句に、家康は云いがかりをつけて法要を中止させ、ついに大阪夏冬の陣が生じて、豊臣家の滅亡を招くにいたった。

大阪夏の陣の結果、大阪の地は徳川氏の支配することになった。かっての大阪は、軍事上、経済上全國枢要の地を占めているので、幕府もここを重視しはじめ、家康の外孫松平下総守忠明を大阪城に封じて十万石の大名としたが、やがて西國地方に対する政策上、直轄地とすることに定めた。

天正十八年（一五九〇）徳川家康は秀吉の命により関東八州の領主となり、同年八月太田道灌が館跡に築いた江戸城に入城、そして関ケ原合戦の後幕府を開き、江戸を事実上日本の中心とした。以来江戸は発展の一途をたどり、一時期八百八町に人口百万をかぞえる世界最大の都市を形成し、徳川十五代治世二百六十八年の長きに及んだ。

織田、豊臣、徳川三人の功罪はともあれ、その頭脳の鋭どさに於いても、その行動の鋭敏さに於いても、又一切の過去の制約を叩き破る果断さに於いても、信長が断然優れている。信長は何よりも天才的武将であった。ナポレオンが天才的将軍であったように、そして戦國動乱の時代に覇者となるためには、何よりもこの英雄としての卓越性が必要なのである。そこで物をいうのは武力であり戦略であって、弁論でもなく又道徳的影響力でもないのだから……。

信長の戦勝一ページを飾る奇襲戦法は、決して彼の軍略の特長ではない。桶狭間合戦の場合は他に方法がなかったため、己むを得ず死中に活を求める意味で、あのような思い切った方法をとったので、それも一般に考えられているように、千番に一番のかね合いで賭博的にやったのではなく、今川軍の動きを充分に調査研究し、大将今川義元の本陣が、前軍から全く隔離されていることを見定めた上で本陣に斬り込んだのであって、可能な計算は充分にやりつくした上でのことである。必ずしも無謀なスペキュレーションではない。

しかし信長は、その後二度とこのような冒険はしていない。この万全の態勢を整えて援軍を集め、最新鋭の兵器である鉄砲などを豊富に備えて必勝の戦いをやっている。たとえば、長篠の一戦などは典型的であったろう。

これは旧時代を代表する最大の武士軍団である武田勢を、新時代の代表織田勢が破った画期的な戦闘であった。ここにおいて、柵が馬に勝ち、集団的行動が個人的武勇に勝ち、合理的指揮が情緒的指揮に勝つことが証明された。

信長と茶道との関係は注目すべきである。彼によって茶の湯なるものが〝その後、日本人の生活と切り離し得ぬものとなった端緒が与えられたものとみてよいだろう。彼の功蹟は単に馬上で天下を取ったものではない。

# 母娘で琵琶の共演

（一月十八日神戸新聞朝刊）

筑前琵琶柴田旭堂さんの第三回リサイタル（柴田旭堂会・神戸市共催）が十七日午後神戸市中央区の神戸文化ホールで開かれ、元宝塚スターで娘の上原まりさんが共演、母娘ならではの息の合ったバチさばきを披露し、約二千人を古典楽器の世界へひき入れた。

旭堂さんは國内はもとよりカナダでも演奏会を持つなど筑前琵琶の普及に活躍しており五十一年に大阪文化祭賞、五十五年に神戸市文化賞を受けている。

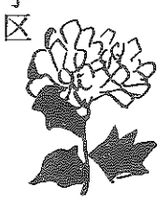
まりさんは「ベルサイユのバラ」では、マリー・アントワネットを熱演するなど人気を集めたが、昨年四月に退団。筑前琵琶の後継者として確かな道を歩んでいる。

今回は、その成果の発表を兼ねたリサイタルで、お弟子さんの演奏に続いて、旭堂さんが「若き敦盛」を独演。緊張感あふれる演奏とノドで、場内を一の谷の合戦の場に変えた。

ハイライトは母娘による「大物の浦」。義経と静の別れ、知盛の亡霊と弁慶が闘う場を扱い、旭堂さんが知盛、弁慶に、まりさんが義経、静を演じ、琵琶をかき鳴らしながら歌い進んだ。知盛の亡霊が暴風雨をまき起こす場面では二人のバチさばきが激しく変化したが、息がぴったりと合っており、会場から盛んな拍手が起こった。

最後にまりさんが、新しい試みとしてピアノ、ベース、シンセサイザーと競演「古典琵琶といえどもシルクロードを通って伝来したもの。洋楽器とルーツは同じ」の信念でおり迫力のある演奏をきかせた。（原文のまま、写真省略）。

# 京都下鴨学区
## 鴨寿会に「桜狩」演奏



一月二十八日（木）。小雪ちらつく弱い冬型の気圧、思ったより穏やかだった。静かな下鴨神社の参道を歩いて参集殿へと、百六十余名が参加す。

十二時半からの余興十数番は明快な司会者によって開始され、マイクも好調、私は「松竹梅」の舞に次いで舞台に立った。

吉水経和「桜狩」は美文調で、「桜花詩」が入って曲を一層盛り上げている。

はっきりと歌詞を生かし、美しく歌い、更には曲中の人物になり切って、また満堂の会員達ものどかな野山の景色を描きながら、古典琵琶をなつかしんで貰へばと念願した。

森閑たる雰囲気に「手綱かいぐるその袖に花の吹雪はかかりけり」。で終止。

糺の森の楽しい総会。本年も一曲の演奏をよろこぶを得た。

（五七・一・三〇）鴨寿会会員　鴨水記

## 京都琵琶協会の総会・新年宴会

一月九日(土)午後四時京都嵐山沿線の料亭鳥米で開催。昨年度事業報告、会計報告、今年度事業協議。引続き二、三会員の研修演奏のあと宴会に移り隠し芸など続出して興尽くるところを知らず、楽しい一刻を過ごし、今年の活躍を約して七時半散会した。（出席者）馬場鴨水、西川磯水、楊嶽水、楊光子、高橋正雄、梅原旭濤、山岡旭清、安住旭康、牧南水、福島弥生、岸本港水、水内燵水、平井春嶺、植村寞水。

## 日琵協関西支部の新年宴会

一月十五日(木)午後四時京都西大路駅前の料亭京みやこで開催。出席者（順不同）山崎旭萃、渡島旭鶯、菅旭香、矢吹旭美津、伊勢谷安江、梅原旭濤、小林義隆、大野皎月、馬場鴨水、三浦蓮水、中島旭穂、田中歓水、岡本旭村、大迫旭山、川上琵水、中山鳳水、平井春嶺、島田旭千、木下皇水、植村寞水、以上二十名（敬称略）。開宴に先立ち本年の支部主催名流演奏会を六月五日(土)大阪北御堂津村別院で開催することに決定して宴に入り自己紹介のあと各自隠し芸などで賑わい盛会裡に六時半散会した。



## 伝統芸能大会

一月十五日(木)午後一時京都八坂神社能楽殿主催日本伝統芸能団、後援京都市ほか。成人の日の協賛で琵琶部は天の羽衣―菊地穂山、福井穂薗・絃旭穂▼伽羅の兜―福西旭紅▼粟津の露―櫛田旭波▼坂本竜馬―中島旭穂。外に詩吟扇舞、石笛、今様、一絃琴、箏曲、狂言、日本舞踊、地唄舞、演武など十九題。

## 大阪琵琶同好会の総会・新年宴会

一月十五日(木)正午大阪天王寺以和荘で開催。五十六年度会計報告、五十七年度事業計画の報告に続いて新年宴会に移り城山―安光長輔▼赤垣源蔵―筧勝隆▼湖水渡り―石田忠義▼河内の宿―米田幸次郎▼川中島―朽木きよ子▼菊水の旗―米原旭智▼菅公―島津旭都▼本能寺―辻旭城▼白虎隊―矢野旭信▼石童丸―野々村幽川▼那須与市―松本旭勇▼吉野懐古―作花旭友▼新曲落城の舞―小林旭湟▼姫百合の塔―石橋旭嶺▼二〇三高地―奥村旭美▼衣川―天津八千代。外に扇舞、剣舞、日舞等数番、最後に記念撮影をして五時終了した。

## 日本琵琶楽協会の定期総会

一月十六日(土)午後一時東京港区日本食堂調理所会議室。（議題）五十六年度事業報告、会計報告、五十七年度事業計画、収支予算案その他協議のあと懇親会が開かれた。

## 柴田旭堂リサイタル

一月十七日(日)午後二時神戸文化中ホール、柴田旭堂会・神戸市共催（有料）。おだやかな好天に恵まれ大会場は満員の盛況を呈した。照明や舞台装置も華やかで、一曲ごとに舞台の背景を歌詞の内容に合わせて模様替えをし、また立方の舞台中央せり上り、或いは桜花爛漫のもと立方の舞踊に花吹雪を上部から散らせるなど一般の琵琶演奏会では滅多に見られぬような凝った規格で聴衆を満足せしめ、最後の琵琶一人と洋楽七人の和洋合奏は新らしい演出で、特に若い視聴者たちの興味をひいたようであった。尚豪華なプログラムには坂井兵庫県知事、宮崎神戸市長らの挨拶文をかかげ、演奏曲目には一々歌詞内容の略説を附記するなど編集の苦心が窺われた。五時終演。

吉野山懐古―美喜旭悠、川村旭鶯、川村旭芳
絃旭寿、旭楓、旭晶、旭海、旭修、旭光▼玉藻の前―髙千穂旭楓、大籔旭晶・絃旭桂、旭海、旭禎、旭甫、旭朗・立方一▼若き敦盛―会主柴田旭堂・立方二▼桜吹雪―上原まり外十一人・箏一、立方一▼（掛合）大物の浦―柴田旭堂、上原まり▼下田雨情―会主柴田旭堂・立方一▼挨拶、祝電披露▼柴田旭堂、上原まりに花束贈呈▼平家幻想（旭堂構成・編曲）―琵琶上原まり・指揮、キーホード、ピアノ安藤・パーカツション、ドラムス内藤・ベース奥田・ピッコロベース伊藤・パーカツション、シンセサイザー土井亮・同土井淳。

## 琵琶楽名流大会

一月二十三日(土)正午東京銀座ガスホール、東京新聞・日本琵琶協会共催（有料）。八甲田山―斉藤幹朗▼粟津ケ原―斉藤旭孝▼熊野―髙田栄水▼桶狭間―中村鶴翔▼扇の的―都穂鳳▼西郷隆盛―内田旭章▼鉢の木―遠藤鶴東▼羅生門―若宮旭登▼本能寺―藤田鶴孔▼大楠公―若林旭洋▼新撰組―森中志水▼川中島―本橋仙舟▼茨木―都錦穂▼小栗栖―三瓶旭鋒▼舟弁慶―荒川洲博・絃荒川洲帆▼酒―小野鶴彦▼須磨の敦盛―広瀬圭穂▼佐野源左衛門―長谷川錦舟▼項羽―吉田央舟▼戦艦大和―林田旭城▼勧進帳―石田脩水▼吉野落（初段）―須田誠舟▼義士の討入―村木桜柳▼都落―板谷旭邑。

## 昇伝披露琵琶演奏会

一月二十四日(日)午後一時酒田市山王クラブ一水会酒田支部・酒田琵琶愛好会共催。金剛石―一同▼蓬萊山―池田青水▼花紅葉―佐藤静岳▼荒城の月―山本笙水、河上蘭水▼城山の月―中林貴水▼羽衣―佐藤烈水、佐々木爽水▼（昇伝披露）春日野―古川順忠▼（同）七郷落―中西豊襄▼（同）霧の川中島―尾形智山▼茨木―佐藤采水▼白虎隊―斉藤姝水・絃荒井藍水▼敦盛―長谷川邑水▼桃太郎―髙見亜記、山田祐▼竜の口―土田宴水▼売花翁―山本周水。外に剣舞、詩吟、舞踊各一番。

## 第三回音文連音楽祭

二月六、七両日(土)(日)午後六時浜松市民会館主催浜松音楽文化連盟（有料）。琵琶部は第一日で花の白虎隊―柿沢篁峰、染谷鶴泉、佐野鶴雲、三上鶴浄、石川鶴晃・歌踊加藤淳一外十七人▼県居邸の一夜―伊藤鶴麗、青島鶴瑛、大石鶴伶、竹原輝祥、桧木輝苑、小野ひろみ、小野しげよ・歌誦芥川ちよ外二十六人▼決戦三方ケ原―小野鶴彦▼門琵琶合奏―小野鶴彦外十四人・尺八佐藤翠敏外二人。（門琵琶合奏を除く三曲は何れも小野鶴彦氏の構成或いは作詞作曲で、歌詞の内容を説明したパンフレットを聴衆に配布）。外に第一日は琴アンサンブル、マンドリン等六題、第二日は管楽グループ、女性合唱団等六題。